

## 大韓民国からの連帯メッセージ

### 世界史の反動を越えて、革命の時代へふたたび前進しましょう ——一九一七年ロシア十月社会主義大革命一〇〇周年にあたって——

ソ連を含む二〇世紀社会主義陣営が敗北して、世界人類の歴史において巨大な反動期が始まりました。資本主義は“歴史の終焉”と言って勝利を宣言しました。グローバリズムの旗をはためかせ、商品と資本で諸国を占領しました。対抗勢力が消えたアメリカ帝国主義は侵略的な本性をはばかることなくさらけ出し、アジア、アフリカ、アメリカからヨーロッパまで弱小諸国を軍靴で踏みにじりました。

しかし、わたしたちは一九一七年を記憶します。ロシアの広大な大地を悲嘆と絶望で覆っていた農民たちが起ち上がりました。労働者と兵士たちは「すべての権力をソヴィエトへ」と叫びました。巨大な革命のうずが全ロシアを席捲しました。ついにツァーリ体制とブルジョワ臨時政府は打倒されました。革命は、人間が人間を搾取する階級社会に終止符を打ちました。人間の労働の生産物が人間を支配する時代に終止符を打ちました。人間が生産力を支配し、そのようにしてみずからの歴史を意識的に創り出す時代を切り拓きました。それは、必然の王国から自由の王国への人類の大跳躍を意味しました。

革命の嵐は世界を強打しました。勤労人民たちを死に追いやった第一次世界大戦に弔鐘が鳴りました。数多くの被抑圧弱小民族の人民たちは民族自決と民族解放を叫びながら、帝国主義に立ち向かい、あらゆる桎梏を振り払って起ち上がりました。モンゴルで、東ヨーロッパで、中国とアジア各国で、アフリカからラテン・アメリカまで、旧体制を歴史のクズかごに放り込む人民たちの闘争は、二〇世紀現代史の滔とうたる流れへとつながりました。

一九一七年の革命は一日で成し遂げられたものではありません。ロシアの人民は一九〇五年の革命で苦い敗北を体験しなければなりません。しかし、一九〇五年の革命の敗北直後に発表されたマクシム・ゴーリキーの小説『母』の主人公であるオモニ、ペラーゲア・ニーロヴナ・ウラーソフは敗北の悲痛さに屈服しませんでした。むしろオモニは「血が海となろうとも、真理の火を消すことはできません」として、ツァーリの憲兵隊の暴力に堂々と対抗しました。一九〇五年の革命の苦い敗北から学ばなかったら、一九〇五年の革命という総演習がなかったら、一九一七年十月社会主義大革命は決して勝利することはできなかったでしょう。

二一世紀の革命を準備すべきわたしたち同志たちも同様です。過去の革命から学ばなければなりません。革命の成果と限界をもっと猛烈に学習しなければなりません。革命の教訓をより広く宣伝しなければなりません。そして、今後の革命を導く隊伍を強固に組織しなければなりません。

過ぎ去った二〇世紀と最近の歴史を振り返れば、資本主義は恐慌に対する解答を、戦争以外にはなにも見つけ出すことはできませんでした。二〇〇七年の大恐慌以後、資本主義はふたたび破局へと昇りつめています。アメリカ大統領のドナルド・トランプは妄動と妄言に明け暮れています。わたしたちはかれのその姿に、資本主義の末期的症状を見ます。生き残ろうと身悶えする、旧体制の絶望的あがきを見ます。

しかし、どんな旧体制も自動的に崩壊しなかったし、歴史の舞台から素直に退場することはありませんでした。ただ上昇する階級の組織的な力だけが、旧体制の抵抗を粉碎してきたことを、わたしたちは歴史から学びました。

同志たちよ。わたしたちは前進しなければなりません！ 「絶望とため息が海を満たすとも、真理の火を消すことはできません」。苦い敗北で終わった世界社会主義陣営の挫折を

打ち破って起ち上がらなければなりません。二一世紀の人類の新たな跳躍の道へとともに進まなければなりません。歴史は結局、わたしたちのものです。反動の歴史を越えて、新たな社会主義の時代切り拓く道に、同志たちとともに歩みます。

労働社会科学研究所 運営委員会

二〇一七年十一月一日

【訳＝土松克典】

(「ロシア十月社会主義革命100周年記念11・4東京集会」資料より)